

ゆくのき通信 第7号 2010年5月



目次

京大植物園と東山修験道・・・・・・・・・・・・・鎌田東二・・・・・・・・・・ 2

名大にある、公然の「秘密の花園」—名古屋大学博物館野外観察園—  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・西田佐知子・・・・・・・・・・ 5

「秘密の庭」の秘密 (1)  
～人知らずして異界に入りぬ～・・・・・・・・・・・・・山下信子・・・・・・・・・・ 7

キューガーデンと熱帯アフリカの植物 ・・・・・・・・・・・・・服部志帆・・・・・・・・・・ 9

おもしろノート (2)  
君知るや北白川御蔭通りのロマン—<sup>ミカゲ</sup>槐 <sup>エンジュ</sup>並 <sup>カイシ</sup>木の「槐市」は大学のルーツ—  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小吹和男・・・・・・・・・・ 13

報告：植物園内の池の周囲への金属製フェンスの建設計画について  
・・ 15

編集後記・・ 16

表紙画 寺田 晶英  
シンボルイラスト かじわられいこ

## 京大植物園と東山修験道

### 鎌田東二

京都大学こころの未来研究センター・教授

わたしが初めて京大植物園を訪れたのは2006年9月初旬のことだった。この最初の植物園訪問時の印象を、同年9月15日(金)付けの毎日新聞夕刊コラム「風の響き」に「京大植物園の価値」と題して次のように書いた。

——最近、京都大学理学研究科附属植物園を見学する機会を持った。京都のような平坦な盆地の街中に、ブナの木があることに驚愕した。けやきの木のような高木の中で、小さいがけなげに立っているブナを見て、胸が熱くなった。

その一角は苔も素晴らしく、柔らかな緑の絨毯を敷きつめたようで、世界遺産となっている下鴨神社(賀茂御祖神社)の境内の札の森の静かで荘厳な雰囲気を出した。

園内の巨大な山藤にはたくさんの蔓が絡まり、ターザンが雄叫びを上げながら、森の中から飛んできそうだと思った。山科からの疎水を引き込んだ水場も風情があり、池も多様な動植物の溜まり場となっていた。

この植物園は、1923年当時の植物学教室が、珍しい植物を集めた栽培園ではなく、生態学的特色を持つ生態植物園として構想・設立し、これまで理学部だけでなく、農学部、工学部、薬学部の研究と教育に貢献してきた。ここをフィールドとして数多くの学術論文が公表されている。

が、3年前、運営体制が変わり、植物園の木を伐採する動きが起こった時、それに見直しを求め、京大植物園のありようを長期にわたり考えていこうとする「京大植物園を考える会」が発足した。当

会は、ともに植物園の将来像を考え、植物園の存在を広く一般市民に知らせ、その存在価値を問ひかけ、生命研究や現代社会の問題をも議論していこうと、シンポジウムや観察会の開催など、活発な活動を展開している。

私の務めている大学からも歩いて十分ほどの距離にあり、現代世界における生命多様性の問題を身近なところから考えていく貴重な動きとして今後とも支援していきたい。——

この頃わたしは、京都造形芸術大学に勤めていて、宗教学や民俗学などの科目のほかに、「生命論」という科目も担当していた。本来、宗教学や民俗学専攻のわたしがどうして「生命論」を担当するようになったかということ、1995年に起こったオウム真理教事件後、宗教と科学、とりわけ、宗教と医学や生命科学との接点を理解することなしにこれからの宗教研究も現代社会研究も成り立たないだろうという思いに駆られ、試験を受けて岡山大学の医学部の大学院博士課程に入学して、6年間、医歯学総合研究科社会環境生命科学専攻課程で主に生命倫理や精神医学を学び研究したので、現代の生命科学や生命倫理の問題を「生命論」という科目の中で講義することができるとカリキュラム編成権を持つ教務委員会に判断されたのだろう。

その「生命論」の授業を入門篇のⅠと発展・応用篇のⅡの2つを担当していたが、特にⅡの授業で見学やフィールドワークを取り入れたいと思い、京大植物園への見学と瓜生山などの東山フィールドワークを授業計画に取り込んだ。10月からの授業の下準備もあって、2006年9月初旬に京大植物園を訪問したわけである。

こうして、その年の10月3日、京大理学

部に植物園見学の申請書を出し、許可され、数十名の学生たちと一緒に植物園を訪ねた。案内に、園丁の中島和秀さんや植物園を考える会のメンバーや大石高典さんをはじめ京大理学研究科や農学研究科の大学院生のみなさんが立ってくれた。



植物園観察会で笛を吹く筆者（撮影：大月健）

ちなみに、中島さんとわたしは、18歳の時からの親しい友人である。1969年から70年にかけて、わたしたちは大阪の梅田や心齋橋で、寺山修司演出の『A列車で行こう』や自作自演出の『ロックンロール神話考』と一緒に制作・上演した仲間であった。その2つの芝居の主演男優が中島和秀さんだった。1973年2月には一緒に作家の稲垣足穂に会いに行ったこともある。その後彼は「石川力夫」を名乗り、神戸に住む俳人・永田耕衣の弟子となり、今も俳人として独自の俳諧世界を築いている。

もう一つ、付け加えておくと、中島さんとは、昔、経本仕立ての『阿吽結氷』という題の二人句集を作ったことがある。「地水火風空識」という空海の真言密教の「六大体大説」を章立てにして、6章仕立ての秘密曼荼羅的俳句世界を作り上げた。右手に阿手の石川力夫（中島君のペンネーム）の俳句を金字で、左手に吽手の水神祥（当時のわたしのペンネーム）の俳句を銀字で書

き、凝りに凝った手作り経本仕立てで、全部で6~7冊しか仕上がらなかった。今から考えても実にユニークな句集であったと自信を持って言うことができる。だが、まったく商売にはならなかった。ただ、作家の中井英夫が面白がって評価してくれたが、なにぶん7冊の出版では評判になるのは不可能だった。

さて、「生命論II」の授業であるが、学生はこの植物園見学に例えば次のような感想を寄せてくれた。「植物園と言っても、温室や花壇やプランターを想像していたが、正に森の姿をしていて驚いた。しかも道路や民家に隣接していることがリアリティを狂わせる。また、森とはいっても外来の（「リヤンタン<sup>1</sup>」？）や竹など、種類が豊富なことや、配置のしかたなど、よく見ると、よく管理された研究所といった姿もある。天気がよく、木漏れ陽、落ち葉などが気持ちよかった。リヤンタンの実が手触りがよく、ルックスも気に入ったのでまた拾いに来たいと思った。」「街中にいきなりこんな所があるのが変だった。」「ネパールにも生える木の実、チャンチンモドキ。ネパールでは食べる。イカルという野鳥が木の実を食べに来る。鳥の鳴き声がにぎやかな感じがした。トウサイカチの木の実は石鹸に使えるらしい。植物にも、脂っぼいやつが居る。地面いったいが苔の新緑に染まっている。吸い込まれそうに深い。ヒガンバナは、根っこに強い毒。しかし人は食用にしていた。木の背が高く、外をドームのように葉が覆っている。パナナの木バショウ、南国ムード。ここはどこ国なんだろう。」「パイナップルの味がする果実を食べた。京都のこ

1 チャンチンモドキのことだと思われる。

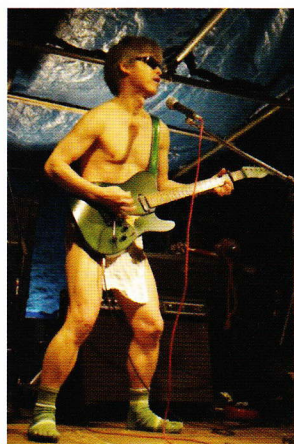
んな所にジャングルがあるなんてびっくりした。ぜひもう一度来たいです。」「誰か、大富豪の人が作った庭みたいだった。土の中はどうなってるんだろう。無法地帯は面白い。」「まるでトトロの世界のようでした。さっきまで自転車を漕いでいたのに、と思ってしまう別世界でした。空気も澄んでいるようで心地よかったです。土の上を歩くのはちょっと足が重たい感じでした。」etc.

芸術大学の学生の反応はなかなか個性的で面白かった。中でも、笑ってしまったのは、「植物園はゴチャッとしていて男子の部屋という感じだったが、なぜか京大らしいと感じた」という感想だった。「ゴチャッとしていて男子の部屋という感じ」が「京大らしい」というのは、なかなか本質をつかんでいるのではないか。素に近い形で生きている生態植物園としての特性は、そんな「ゴチャッとして」いるところにあるのではないだろうか。そして、果敢にフィールドワークを敢行して、世間で「探検大学」とまで呼ばれるようになった京大は、そんな「ゴチャッ」を大事にした方がよいと思ったのだった。スマートさや小洒落なものがもてはやされたり好まれる現今、そんな一見野暮天に見える「ゴチャイズム」を大事にしていきたい。そしてそれは生態植物園としての京大植物園の個性を守りつつ現代に生かすことでもあると思うのである。

わたし自身は、自分流の「ゴチャイズム」を「東山修験道」として実践・実修するようになった。それについては拙著『聖地感覚』（角川学芸出版、2008年）に詳述したので、参照していただければ幸いである。

ともかく、植物園見学を始めた年の11月のある日、2時間ほどの時間の余裕があっ

たので、詩仙堂の奥から東山に入り、道なき道を這いずり、迷いながらも、瓜生山を抜けて白川幼稚園に出るというハイパー道行きを体験したのだが、それから毎日のように東山に入り浸り、挙げ句の果ては東山の麓に棲みつき、1週間に1度は瓜生山か比叡山に上り下りするような、猿や鹿や猪に近い生き物になってしまった。



植物園まつりでライブをする筆者（撮影：大石高典）

わたしは長い間、神仏習合にして修験道の聖地霊場である天河大辨財天社に詣でてきて、修験道という文化と伝承と技法の中に、日本列島の風土の中で錬成されてきた「自然智・身体智・生態智」があると実感するようになり、「生態学的身体智」とも言える「自然智・生態智」を生きる糧にしたいと強く思うようになった。

そんなわたしにとって、京大植物園は「ゴチャイズム」と「東山修験道」の発祥の地であり、心強き友であり、人工と野生との共生のモデルである。その友であるモデルとともに、さらなる探究と実践に赴きたいと思っている。

ごちゃごちゃといきゆくもののねいろかな

## 名大にある、公然の「秘密の花園」— 名古屋大学博物館野外観察園—

西田佐知子

名古屋大学博物館・助教

名古屋大学は、比較的都心に近い大学のわりには、敷地の中に雑木林が残る、恵まれた環境にあります。今回紹介するのは、しかし、その天然林に近い雑木林ではなく、人の手が入ることで続いている緑地です。名古屋大学博物館が運営している野外観察園で、東山キャンパスの南部生協の西隣にあります。

名古屋大学博物館野外観察園<sup>2</sup>は、4230 m<sup>2</sup>の緑地です。藤棚をくぐって入り口に入ると、右手に花壇や畑、温室があり、左手に小さな林があります。高木、低木、草本などが地植えや鉢植えで育てっており、全体で 500 種を超える植物がみられます。春には暖かい日差しに花が咲き乱れ、授業や仕事の合間に訪れる人たちに、「秘密の花園」と呼ばれることもある、小さな緑のオアシスです。



秋の野外観察園（撮影：筆者）

<sup>2</sup> 名古屋大学博物館野外観察園  
<http://www.num.nagoya-u.ac.jp/display/garden.html>

ここは約 40 年前、名古屋大学の教養部の圃場として造られました。教養部とは、大学 1, 2 年生に専門学部に限らない広い科目の授業をするため作られた学部で、当時の圃場には、授業で使う植物や、教養部の先生の研究に使う植物が育てられていました。しかし、大学の組織改編が進み、やがて教養部がなくなりました。植物を育てていた先生も他学部へ移ったり退官して、ほとんど圃場を使う人がいなくなりました。そのため、圃場を残しておいても無駄だという意見も出て、一時は更地にして駐車場にする案まで出てきました。

このような状況の中、「秘密の花園」を愛する先生達が、圃場の保護を大学に働きかけました。様々な議論が交わされたのち、2003 年、圃場は博物館が管理・運営にかかわることで、一般の人も楽しんで植物が学べる場所となるよう、野外観察園という名前で生まれ変わったのでした。

野外観察園のうち、北の半分は花壇や畑として、研究用植物や身近な植物（ワタ、ハッサク、クリなど）が植えられています。植物形態学の権威である熊沢正夫先生がトゲの研究に使った低木なども、昔のまま生えています。小さな池や水瓶があり、食虫植物のミカワタヌキモが生え、世界でも最小級のトンボ、ハッチョウトンボが生息しています。温室にはチョコレートののこのするランや、ウツボカズラなどもあります。南半分は半自然の雑木林になっていて、東海地方に隔離分布するヒトツバタゴや学問の木といわれるカイノキなどが植えられ、雑木林を西に進むと、細長いドングリの林が続いています。ここは昔、ほとんどゴミ

捨て場のような状態だった所を、やはり「秘密の花園」を愛する先生達がゴミを取り除き、ドングリを蒔いたことで、今ではアベマキやコナラ、シラカシやアラカシがざわめく「ドングリの小道」になりました。

名古屋大学博物館が管理・運営するようになってから大学の支援が続き、ガラスが割れていた温室も新しいものに生まれ変わり、横には小さいながらも実習などができるセミナーハウスも建てられました。今では平日は誰でも散策できる、開かれた「秘密の花園」になったのです（ただし、ミカワタヌキモやハッチョウトンボ、温室などの部分は、見学会のみの公開です）。私は博物館に勤務していることから、この野外観察園が博物館に任される経緯や、少しずつ整備される様子を見せて貰い、ときに計画などにお手伝いさせてもらってきました。



野外観察園の生き物リスト（名古屋大学博物館発行）

その中で感じるのは、当たり前といえば当たり前ですが、この緑地を「残す」と「活かす」こととの間の大きな隔たりです。

教養部の圃場がなくなることを惜しみ、幾人もの先生が「残す」ことに力を尽くしました。その結果、いまでは大学の一つの公共の場として、緑地が緑地として続くことになりました。でも、それが野外観察園となったいま、十分に「活かす」きれているとは、正直言えない状態です。できるかぎり樹木札をつけ、入り口には案内を置き、年に数回見学会なども行っていますが、この観察園をいま訪れる人たちが、昔のように「大切な大切な秘密の花園」と個人的に思ってくれるようになっていくかどうか、不安を覚えます。昔は誰も知らないから「私の秘密」だったのに、誰でも入れるようになったいま、秘密の喜びはなくなりました。その割には、案内や憩いのベンチなどもほとんどなく、漫然と木や草が生えているだけで、訪れる人の「特別な場所」には格上げされていない気がします。

植物園としては、さりげない林の風情も残したいものですし、しかし、せっかく手を入れられる圃場なので、積極的に「生きた展示」を進めたい気もします。ただ、展示するのは生き物なので、それを改変するためには殺したり弱める必要がでてきます。そうやって今ある植物を排除してまで、本当にいい展示が作れるかどうかとも自信がありません。そんなことを考えている間にも、繁茂する雑草を抑えたり、研究用の植物を手入れしたり、降ってきそうな枯れ枝を払ったり、電線にかかりそうな枝を切り落としたり、今の状態を維持するだけでも手一杯です（このような仕事は、技術職員の方がたった1人で懸命にこなしてくれています）。「一度根本的に将来計画を作って・・・」と思いながら、これとい

った策もなく、策を思う間もないまま、植物の勢いに何とか追いつこうと日々が過ぎていく、という感じです。

これはまさに、庭いじりに常にある苦悩でしょうし、かつ、村おこしとか里山保全とかにも共通する苦悩のような気がします。この苦悩が、やりがいある苦悩と思って楽しめたらいいのですが、今の自分にはその能力も余裕もなく、情けないありさまです。自分のことは棚にあげ、今の自然保護や里山保全などの状況を見渡すと、「私だけの秘密の花園」だった多くの自然が、その価値を主張しないと残せない、「公の花園」になってきている気がします。そして、なくてはならないと、目前の大課題である「残す」ことは何とか達成できても、なら「ちゃんと活かさない」と言われても策がない、そんな場所がたくさんでている気がします。うまく活かして残しているところも多いのでしょうか・・・、ぜひいい例を知っていたら、教えてほしいと思っています。

名古屋大学で公となった「秘密の花園」、どうやって公然の秘密としてみんなに愛されていけるのか、今日もまた悩みつつ過ぎていきます。春までには何か一つ進められたら、と思いながら、舞い込んでくる梅の便りに心ばかり焦る毎日です。

## 「秘密の庭」の秘密 —その1— ～人知らずして異界に入りぬ～

山下信子

映像作家・「オルフェの袋小路」主宰

京都市左京区田中東樋ノ口町在住

三方を山に囲まれ、緑豊かに山紫水明と謳われる京都。確かに春と秋の季節良い頃は素晴らしく気持ちよい。ところが、夏の暑さと冬の寒さは半端ではない。夏のあまりの蒸し暑さに、京都を愛する欧米人たちは、7月の半ばでみなさっさと逃げ去り、インドネシアからの留学生は、「京都が熱帯だとは知りませんでした。」とため息をつく。聞いてみれば、彼の国では昼間はすごく暑い、毎日スコールがあるので、京都よりずっとしのぎやすいとのこと。冬の底冷えする寒さには、かの夏目漱石も我慢ならなかったようで、日暮れて着いた宿は寒く、休もうとした夜具には「掻巻がない!」と本気で怒ったことをエッセーに記している。そんな古都に私は数十年住み続けている。しかも、漱石の頃と変わらないだろうクーラーなしの古い木造の家に…。

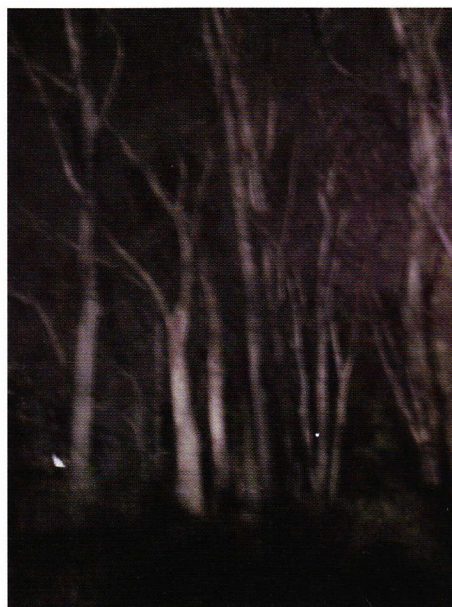
どう頑張ってもクーラーのない室内に居続けることができないような日が一夏に数回はある。それは梅雨の終り頃、そんなそよとも風はなく、異常に蒸し暑い夜だった。扇風機で頑張っていたが、あまりの息苦しさに耐えられず、涼を求めて夜半に部屋を飛び出した。古家の庭に出てもいたたまれない。皆寝静まり、クーラーの室外機だけが熱風と騒音を立てている。アスファルト道路も苦しい。どこか少しでも居心地の良

いところはないかと、ふらふら歩き、京大北部キャンパスの農場あたりにやってきた。ここは市中では珍しく大きな空があり、山や木々も遠望できるさわやかな通り道だ。だが、立ち止まれない。もっと静かな心地よい所、木立の方へと緑の方へと足は向かう。

暗がりの中、人気のない建物をすり抜け、繁茂する雑草をかき分け、得体のしれない障害物も踏み越えてさまよい歩き続けるうちに、ふいに気付いたのだ。私は、私が望んでいた所、深い森の中にいる事に。まるで、探し求めていた所は「ココです」と言わんばかり、湿った土と多様な木や草花の発する芳しい爽やかな匂い。深い森の中だけにある、ひんやりとした空気と湿気と濃密な緑の香りと生き物たちの気配と。そして小さな、涼しい風。立ち止まり、大きく息を吸い込んでみる。ああ、鼻からも口からも、新鮮で酸素の濃い大気に満たされる。しかし、こんな近くに深い森などあったかしら。しかも真っ暗だ。暗がりに慣れてきた眼に見えないほど黒く木々が生き茂っている。見上げれば、月も星もない曇天のほんのり明るんだ空に、木々の枝葉の黒いシルエットが覆いかぶさり、怖いくらいである。木立はしんと静まって、葉っぱ一枚動く気配もないがゆっくり歩いてみるとあちらこちらに緩やかな風の道がある。

あ、向こうで水音がする。小川や池もあるらしい。暗がりの中、おぼつかない足で一渡り歩いてみたいが、暗くて何も見えない。鳥や獣や昆虫や、多くの生き物が存在する気配はするのに、眠っているのか、ひたすらしいんとしている。実に不思議だ。

自分自身が木の枝や葉っぱに当たったり、踏んで立てる音だけが不粋に大きく聞こえる。また耳を澄ましてみる。特別な音はない。「あ、森も耳を澄ましている」と感じた。そしてその時、私は思った。私は森に聞かれている、見られている、と。深夜の闖入者を、眼ではなく気配としか言いようのないもので森は見張っている。



夜の京大植物園。月明かりを反射して、木々がぼんやりと浮かび上がる。(撮影:大石高典)

怖さを感じながらも、深く息を整え、もつと森の気に溶け込み、森の“ことば”を感じようとした。森は何かを言いたいのではないか。しかし私にはわからない。森全体で何かを伝えようとしている。森は〈秘密〉の言葉で話し合っている。それはどんな言葉なのか。森は、大きな黒い謎となつて、私を飲み込み覆いかぶさっていた…。

どれほど時間が経ったのか。入ってきた所はもう分からない。灯りの方へ、街燈の



光を目指して外へ出ようとした。土の道が舗装路になり、道を塞いで大きな扉があった。むろんそれは閉まっていて、一瞬、「出られない」と思ったが、大きい扉には小扉が付いていて、ドキドキしながら動かしてみると、こちらは難なく開いた。私はこの不思議な異界から脱出することができたのだ。そして街燈の明かりのもとで、扉の所から次第に暗く深まるその世界を見た。そしてこの異界は一体何と言う所なのかと目を凝らすと、門柱にはきちんとその名が掲げられていた。愛らしくも風情ある陶板に浮き彫りにされたその名は、「理学部植物園」。

こうして私は、あの“謎”を少しでも理解したいというひそかな想いを胸に、この異界をたびたび訪れるようになったのだ。今から十数年以上も以前のことである。

## キューガーデンと熱帯アフリカの植物

### 服部 志帆

日本学術振興会特別研究員

ロンドン大学客員研究員

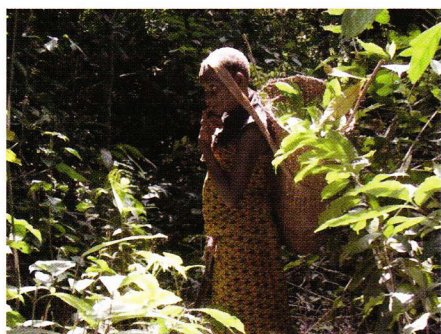
キュー・ガーデン<sup>3</sup>(以降、キューとする)を初めて訪れたのは、2001年3月、初めてアフリカの地を踏んだあとのことである。ロンドンやキューの記憶は、初めて歩いたカメルーンの森の陰影とともに鮮やかである。その後、イギリスをゆっくり訪れることはなかったが、予期せず、2009年10月から1年間ロンドン大学人類学科に研究員としての籍をえることになり、眠っていた記憶は目を覚ますことになった。

初めてキューを訪れたとき、秩序だった植物たちの世界に目を見張った。植物は、学名や生息地の情報とともに陳列され、訪れた人々はそれぞれに植物を楽しんでいた。なんてお行儀のいい植物と人々だろう。見てきたばかりのカメルーンの森の植物や人々とはずいぶんと様子が違う。熱帯の森で、植物は勝手気ままに伸び盛り、秩序とは無縁のようにみえた。とてつもなく大きな緑のトンネルを作り、生命のエネルギーがみなぎった空間で、人間は動物や植物とからまりあうように生を営んでいた。

私が研究対象としている狩猟採集民バカ・ピグミーは、森の植物を形態や生息地などによってつぶさに見分けている。植物はそれぞれに名前がつけられ、食料や建材、

<sup>3</sup> Royal Botanic Gardens, Kew  
<http://www.kew.org/>

道具類や薬、狩猟や漁労で使う毒の材料、交易品として利用されている。植物は実用的に利用されるだけでなく、彼らの信仰の世界と深くかかわっており、名脇役として歌物語のなかに登場することもある。彼らの生活は、植物なしには成り立たないと言ってもいいだろう。



うっそうとした森で植物採集をするバカ・ピグミーの女性（撮影：筆者）

そのように植物と関わりの深いバカ・ピグミーであるが、彼らが植物園を作ることはないし、植物を並べて鑑賞するというものもない。彼らにはそもそも自然をコントロールしようとする発想自体がなく、森が与えてくれるものをそのままシンプルに利用しているだけである。バカ・ピグミーの自然との関わり方は、イギリスや日本を含む多くの社会と異なっている。

私は、このようなバカ・ピグミーと森林の関わりや植物の知識について研究を行ってきたのだが<sup>4</sup>、今回『ゆくのき通信』に紙

面をもらい、キューについて思うところを書かせてもらえることとなった。しかし正直に告白すると、私は植物園や博物学についてまったくの素人である。的を得た議論など到底できそうにもないが、私なりにおもしろそうな植物園について思い描かせてもらいたい。

まず、キューについて説明しよう。キューの正式名称は、キュー王立植物園 Royal Botanic Gardens, Kew。1759年にジョージ3世の母后プリンセス・オーガスタが庭師に依頼して作らせたのが始まりである。その後、博物学者であり植物学者であったバンクスが海洋探検家キャプテン・クックについて世界中を旅した際に収集した植物のコレクションを加え、植物園は充実したといわれている。現在4万種以上もの植物が育てられ、700万点以上の植物標本が保管されている。誰もが認める世界最大の植物園である。約300エーカーの園内には、熱帯や温帯の温室、10種類の異なるミニ気候帯を散策できる温室、ジョージ3世の離宮、庭園、人造の湖などがあり、世界中から観光客が訪れる。2003年には、歴史的建築物として評価をえて世界遺産に登録された。

キューはまた植物の研究機関としても有名である。約800名ものスタッフ（このうち、約250名が研究者）が所属しており、世界各地で植物の研究と保護活動を展開している。大学と連携しながら修士や博士課程の学生の指導を行っているほか、ハーバリウムや植物園の運営、植物の保護や同定作業など専門家向けのトレーニング・コー

<sup>4</sup>服部志帆、2005「モンゴル、葉っぱで出来た家」布野修司（編）『世界住居誌』、昭和堂、pp.262-263.; 服部志帆、2006。「バカ・ピグミーの民族植物学 I : カメルーンの森の食用植物」『プラント 107号』、研成社、pp.55-59.; 服部志帆、2006「バカ・ピグミーの民族植物学 II : カメルーンの森の建材と物質文化」『プラント 108号』、研成社、pp.37-41.; 服部

志帆、2006。「バカ・ピグミーの民族植物学 III : カメルーンの森の薬用植物」『プラント 108号』、研成社、pp.42-46.

スを開講している。植物関係の図書の出版にも熱心である。

さて、熱帯アフリカの植物とキューについてみてみたい。まず、熱帯に生息する植物をそのまま展示しているパームハウスがある。この温室は1884年から88年に建設され、ここの一角にアフリカの植物が陳列されている。



熱帯の植物を展示するパームハウス（撮影：筆者）

アフリカセクションの20m×10mほどの空間に3列の花壇が配置されており、植物が植えられている。植物はそれぞれに、学名や生息地の書かれたプレートがつけられている。眺めてみると、西アフリカ、熱帯アフリカ、マダガスカル産の植物が目につく。私の調査しているカメルーン東南部の植物は、西アフリカや熱帯アフリカと書かれたプレートが付けられていた。油ヤシやラフィアヤシ、ヤマイモ、マランタなど、現地の人々にとって重要な調査地を代表する植物たちをはじめに、ツユクサ科、パンレイシ科、クワ科の植物などがみられた。

展示されている植物は実際にアフリカ熱帯に生息する植物のごく一部であるが、標本のコレクションは膨大である。キューの

ホームページから検索ができ、科名や学名、地域やコレクター名を入れると、該当する植物の情報が写真付きで出てくる。ためしに、「カメルーン」と入れると、なんと4453もの標本がヒットした。



写真 パームハウスのなかで行儀よく並ぶ熱帯アフリカの植物（撮影：筆者）

現地調査や保護活動について、残念ながら、筆者が調査を行っているカメルーン東南部を含む中央アフリカ熱帯林は射程外であるようだ。ただし現地調査ではないが、ワシントン大学が2000年から進めている熱帯アフリカの植物7000種の利用のデータベース化や情報の共有化のプロジェクト、PROTA(Plant Resources of Tropical Africa<sup>5</sup>)に協力している。そして忘れてはならないのが、キューの植物学者バーキルが、西アフリカや中央アフリカにおける民族植物学的情報をまとめた“*Useful Plants of West Tropical Africa*”<sup>6</sup>の刊行である。20年近くもかかって刊行された、合計で6巻になる

<sup>5</sup> Plant Resources of Tropical Africa  
<http://www.prota.org/uk/About+PROTA/Home.htm>

<sup>6</sup> Burkill, H. M. 1985-2004. *The Useful Plants of West Tropical Africa*. Vol.1-6. Royal Botanic Gardens, Kew.

この本には、約 5500 種の植物の分布や民族ごとに方名や利用法が記されている。私が、対象としているピグミー系狩猟採集民の植物利用について十分に記載されているとはいえないが、西から中央アフリカにかけて分布するさまざまな民族の植物利用に関する情報を網羅しようとした壮大なところみだと思ふ。

熱帯アフリカの植物のコレクションの豊富さや民族植物学的なところみなど、キュー以外では見られないすばらしい業績だと思うが、どうも気になって仕方がないことがある。温室における植物の展示方法である。わたしは、アフリカの森や植物の素晴らしさは、その混沌とした世界と人間との切っても切り離せない関係にあると思う。植物が縦横にのび、人間が動物や植物とごちゃごちゃになって暮らしている森が魅力的なのである。



野生ヤム<sup>7</sup>を食べるバカ・ピグミーの男性たち (撮影：筆者)

植物園でアフリカの森と人々をより生々しく伝えることはできないだろうか。動物やそこに暮らす人々はいないとしても、そこになんらかの形跡を残すことはできない

だろうか。たとえば、植物のプレートに利用方法を載せることが考えられる。またアフリカの森の一角をそのまま移してきたかのように、大小さまざまな植物のからまりあう生態とそのなかに溶けこむように佇むバカ・ピグミーの住居、そのまわりに籠や山刀、槍などさまざまな道具類を転がっているように展示してはどうだろうか。来訪者がアフリカの森に迷い込んだような思いに駆られる空間ができればおもしろい。

先日、約 9 年ぶりにキューを訪れた。なじみの植物たちのすました様子を眺めながら、植物が自由のびやかに手足をのばし、そのなかを人間が縫うように歩くカメルーンの野生の森を懐かしく思った。

<sup>7</sup> safa (*Dioscorea praehensilis* Benth., ヤマノイモ科)

おもしろノート 2

君知るや北白川<sup>ミカゲ</sup>御蔭通りのロマン

エンジュ<sup>カイシ</sup> 槐並木の「槐市」は大学のルーツ

小吹和男

日本自然保護協会自然観察指導員

「面白い」という言葉は、とても面白い。「面白い」には、人の心を明るくし、笑いを誘う標準型の面白いと、何か新しい事柄、現象、発想や美に出会った時の感嘆的な面白いも面白く、日本文化を高める大きな力になっていると思う。

京都市左京区北白川小倉町。京都市バス停「北白川小倉町」で降りると、そこが槐並木の御蔭通り。その御蔭通りは東西の通りで、南面に民家をはさんで広大な京都大学農学・理学部のキャンパス。北面は前庭を持つキリスト教会や瀟洒な民家が並んでいる上に、道の両側に植えられた槐並木の梢が道路をおおって、トンネル状をなして、何となくエキゾチックな雰囲気を持つ通りです。そして、毎年7月下旬には、並木の槐は白い花を枝もたわわにつけ、ホロホロと風にこぼれる花で、樹下は真白くおおわれます。私は、かねてより槐は古代中国において、高貴な木とされていたと聞き及んでいました上に、公道上の槐並木は私の知る限り、京都市内はここ一ヶ所のみであるため、何かそこに意味があるろうかと持ち前の探求心発動となりました。

さて、植物にまつわる話題調査には、その

植物が漢字名である場合、大漢和辞典が手近で最も参考になる所から諸橋轍次著のそれ<sup>8</sup>を早速ひもといてみました。



エンジュ (*Sophora japonica* L.)

(図案作成：筆者)

すると「槐<sup>クワイ</sup>、忍<sup>ニン</sup>じゅ」に始まり、60項目程の、主として古代中国を源とする記述がありました。その蕾が米粒大の時、炒って水に煎じ出して黄色染に用いるとあるのは、草木染めの参考となりましょう。又、材は建築や器具の製作に用うとの事。「鬼聲、木に従う」とあって、槐の字源や、槐は雷除けとの風習の由来をうかがわせます。又、古代中国の周(B.C. 650-250)において、宮廷の庭に槐樹を植えて三公(官職=周禮、秋官、朝士)の座を定めるとあって、槐に対する信仰的神秘性を伝えます。更に「槐市<sup>クワイシ</sup>」なる頃があって、要約すると、それは中国漢代(B.C.206-220)、長安城の東にあった市場の名で、「槐樹を列ね植えて墜道(トンネル状)として、周囲に建物、垣根や築地塀を設けず、朔望に(新月と満月の月二回)人人が集い、

<sup>8</sup> 諸橋轍次, 1990『大漢和辞典』大修館書店.

各地の産物、書物、又楽器等を売買し、又各人、喧喧囂囂討論、議論、学問の場とした。よって、後に「槐市」は「大学」の異名として用いる……とあって、それは現代も中東地方に見られるバザールにあたるものであったようです。

1213年前、桓武天皇は平安京遷都に当り中国の條坊制を導入したが、仮に長安の町を京都の町へ重ね合わせたとして、その東にあったという「槐市」を、やはり東部にある北白川小倉町と見る時、なんとそこに現在、隧道状の槐並木が実在し、更にそれは京都大学農学・理学部の広大なキャンパスに接しているではありませんか。それは又、私にとっての大きな驚きとなりました。が、しかし他方、それは単なる偶然の一致なのかも知れず、私が自らのロマンをこじつける憶測にすぎないのかも知れません。けれども、その動かぬ不思議な事実を目をつむる事も出来ず、私は北白川小倉町に槐並木を作るについての企画者の心を知りたくて、京都市の街路樹担当部へ問い合わせました。

その結果、先ず私の思った通り、街路樹としての槐は西京区の新開地を除いて、旧市内には見られない事、京大の上賀茂演習林で薬用植物標本として栽培されていたものを、日中戦たけなはであった昭和12年(1937)、市道路路部によって植えつけられた事、更に企画者や個人的意図は不明等々詳しく教えられました。又、参考として円山公園内に中国西安市より友好都市の京都市へ贈られた「枝垂れ槐」がある事、その姿があたかも昇天する龍に似る所からステイタスシンボルとして、中国で珍重される事等々も教えられました。

という事で、本稿の主題である古代中国、槐市へのロマンは雲散霧消するやに見えませんが、どうしてどうして簡単には諦められません。なぜなら、昭和12年(1937)という日米戦中にもかかわらず、北白川小倉町の街路樹としてわざわざ珍しい槐を選んだ人が実在されたのも否定出来ない事実であるからです。そして、そんな中国故事のロマンを京都の地へ写しとって、秘かに喜んでいた奥床しい、ヒョッとして京都帝国大学農学部出身のお役人が居られたのかも知れません。

以来57年を経た今日、わたしはそんなロマン溢れる人物の秘かなロマンに、大いなるロマンを感じ、ここに京都市左京区北白川小倉町、御蔭通りの槐並木を世に顕彰したく、拙文をしたためた次第です。



植物園観察会にて、手書きのイラストを用いて説明する筆者（撮影：大石高典）

## 報告：植物園内の池の周囲への金属製フェンスの建設計画について

### 1. 問題の経緯

2010年2月25日に植物園観察会が行われた際、参加者が池の回りに工事用の目印が打ち込まれているのを見つけました。その時点では、目印が何のためのものかわかりませんでした。



2月の観察会の際に発見された目印（撮影：大石高典）

その後、3月5日に植物園運営委員長に直接電話で問い合わせた結果、次のことが明らかになりました。「運営委員会での議論を経ずに、植物園のメインの池に金網のフェンスが張られることになったが、これは一部の委員の独断により工事が決定され発注されていたもので、手続き上問題があるので工事を中止した。」そして、「これは手続き上の過誤であり、安全性の問題からフェンスの必要性は引き続き議論してゆく。」との見解をいただきました。

### 2. 現状と対応

フェンス建設が予定されていた場所では、現在研究中や近い過去に研究利用した大学院生や研究者がいますが、このフェンス工事

計画についての一切の情報提供や意見伺いはなされていませんでした。研究教育を目的として設置されている植物園に、安全性のためのフェンスが必要かどうか疑問があることから、電子メールで連絡がつく考える会関係者から意見を募集し、その全てを申し入れ書として3月31日に植物園運営委員会に提出しました。その際、運営委員長と会談して、植物園で現在も続けられている研究教育に対して、フェンス工事に関する十分な周知やその影響に対する配慮がどのようになされたのかを公開して欲しいこと、また7年前に園内樹木伐採問題が起きた時に約束した、学内の研究者や実際に植物園を研究利用している院生などを入れた「利用者協議会（仮称）」の設置がその後どうなっているのか等について尋ねました。申し入れの具体的な文面については、近日中にホームページ<sup>9</sup>にて公開する予定ですが、要望書の内容のポイントは概ね以下の通りです。

- ・池の周辺で研究や観察を継続して行っている学生や研究者への配慮の欠落。
- ・運営委員会のメンバーにさえ知らされぬままに、工事の施工が発注されていたとすれば、植物園運営委員会の存在意義は何か。
- ・来園者の安全を考えたときに、1.5Mもの高さの金属製フェンスを池の周囲に設置することの妥当性への疑問。

考える会では、フェンス問題について、引き続き、状況の把握と必要に応じた植物園運営委員会とのコミュニケーションを行ってゆきます。この問題について、ご意見や感想のある方は考える会までお寄せください。

<sup>9</sup> 京大植物園を考える会ホームページ  
<http://members.at.infoseek.co.jp/bgarden/>

## 編集後記

3月発行を目指していた『ゆくのき通信』第7号の刊行がまるまる2カ月遅れてしまいました。まず、お忙しい中を寄稿してくださった方々にお詫びいたします。

3月初旬の最終稿の編集途中で、3週間以内に植物園の池の周りにフェンスを造る計画が進んでいる、という切迫した状況が発生したことから、この現在進行中の出来事の経緯報告を紙面に入れることとし、構成も当初予定していたものから編成しなおしました。前回予告しました特別座談会の掲載は次号になります。

今号では、予期しないことに「秘密の花園」論と言ってよい寄稿がいくつか集まりました。大切な場所、誰にも知られたくないとおきの場所としての植物園と、公共に開かれた場所としての植物園。『開かれた大学』とよく言われますが、植物園に限らず、どんな開かれ方がより多くの人にとって幸せなのか考えさせられます。

2010年4月30日 大石 高典

京大植物園を考える会ニュースレター

ゆくのき通信 第7号

発行：2010年5月20日 京大植物園を考える会

印刷：北斗プリント株式会社

事務局：〒606-8799 左京郵便局私書箱5号

URL: <http://members.at.infoseek.co.jp/bgarden/>

E-mail: [kyotoubg@gmail.com](mailto:kyotoubg@gmail.com)